
生まれる命に祝福を

春蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれる命に祝福を

【Nコード】

N4504B

【作者名】

春蘭

【あらすじ】

背伸びする私、大人の彼、生まれる子供。ねえ、私の気持ちに気付いて、でも、知らないふりしてて……。

（前書き）

この小説は企画小説に参加させて頂いたものです。テーマは『命』。
命小説で検索しますと、他の作者さんの命小説もご覧になれます。

昔、アリの巣に水を流した記憶がある

トカゲの尻尾を切った記憶がある

純粹に楽しいと思った自分がいた

残酷なんて、気付かないで

生まれる命に祝福を

蜘蛛の巣に、紋白蝶がかかっている。白い羽を羽ばたかせ、絡まる糸から逃れようとする蝶、巣の主は何処に行ったのか留守だった。今私が蝶を助ければ、この蝶は生き長らえる。わかっているけど、私はしゃがみこんで見つめるだけ。

「……可哀想なんて思えない」

暴れる蝶にむかい、小さく呟いた。蝶は私の言葉に反応せず、相変わらず羽を忙しく動かしている。所詮は独り言。返事なんていない。

サアツと風が吹いて、透明に近い糸を揺らした。それに比例して、

逃れようとしている蝶も揺れる。

西に沈む夕日が、私を後ろから照らす。目の前にある蜘蛛の巣は、明るい橙色に染まっていた。それがひどく幻想的で、私は目をすとと細める。

「あ、鈴華。こんな所にいたのか、おばさん探してたぞ」

神秘的な気分浸っていた私を邪魔する、やや低い声が入ってきた。内心不機嫌になりながらも、表情には出さず見上げる。

「なんだ、蓮か」

「年上を呼び捨てするな」

ムツと口を尖らせ、立ちながら私を見据える彼は、私の幼馴染み。オレンジに照らされた顔は、影がかかり表情が見えにくい。

「帰ろう、もうすぐ暗くなる」

私の隣にしゃがみこみ、瞳を覗きこんでくる蓮。いきなりのアツプに、早くなる鼓動をなんとか抑え、顔が赤くなる前に目をそらした。

視界の端にちらついた紋白蝶。未だに糸から逃れられていない。私は両手を頬にあてて、再びじっと見つめる。蓮も気付いたのか、あっ、と声をこぼした。

「助けてあげないわけ？」

「……私が蝶を味方する理由なんてないじゃない。人間っていつつても弱い者に同情するよね。蜘蛛と蝶、カラスと鳩、ライオンと鹿、白くまとアザラシ……。弱肉強食の世界に勝手に口だして、自分たち

だって牛や豚食べてるくせに」

蓮を見ずに淡々と言うと、彼はため息をついて頬をぼりぼりと掻く。

「すごい理論だな、小学生の考えることじゃない」

と、言いながら。呆れを含んだその言葉に、私はキツと彼を睨んで

「青春真っ盛りの高校生の蓮には、わからないでしょうね」

皮肉っぽく言い捨てた。

高校生の蓮と小学生の私。一緒にいると、よく兄妹に間違えられる。

昔は『蓮兄ちゃん』って呼んでいたし、なにより蓮は私のこと妹扱いするから、そう見られても仕方ないかもしれない。

いつからか、彼をお兄ちゃんと呼ばなくなった私。だけど蓮は今でも私を妹みたいに見てる。

なんて不公平

太陽は三分の二が沈み、空は暗褐色に変わっていく。時々流れる風も、冷たさが増してきた。そして、ふと気が付いた、蜘蛛の存在抗う蝶に、現れた主はゆっくりと近づく。

なんの感情も映さない瞳で見つめる私と、弱ってきた蝶を、蓮は交互に見てた。

「……こういうのは、教育に悪い」

小さな声で呟き、彼は蝶を糸からそつと剥がした。解放された蝶は、ふらふらと揺らめきながらも、風にのって空へと消えていく。

置き去りの蜘蛛が、哀しそうに見えた私は歪んでいるだろうか。

「教育って…、子供扱いしないで」

「だって鈴華は子供だろう？」

私の心も露知らず、ケロリと言ってみせた蓮。無意識に眉間に皺が寄る。同等に見てほしいなんて無茶かもしれないけど、子供扱いは嫌。私は充分自立してるんだから。

「…なあ、帰ろうよ鈴華。なにすねてんだ？」

私の頭を軽く撫でながら、あやすように話しかける。私はその手を振り払って言った。

「すねてなんかない」

嘘。本当はすねてるくせに。我ながら意地っ張り。

「おばさん心配してたぞ」

彼は極めて優しい声色を出す。ずるい、こういうときだけそんな声するなんて。私が蓮の優しさに、弱い知らないの？

「お母さんは、私の事なんか気にかけてないよ。お腹の子に夢中なもの」

うつむいた私に、蓮はそんなことない、と諭す。だけど私はやっぱりうつ向いたままで。しゃがんだ自分のつま先を、ただ見つめてた。

「だってお母さん、私の話聞いてくれない。自分の大きいお腹をさすりながら、その子の話ばかりするの」

そうこぼしつつ、恥ずかしくなった。私、まだ生まれてもない子に嫉妬してる。

大人びてるとか言われるけど、余裕ぶったりしてるけど、私は全然子供だ。こんなヤキモチ、物凄く幼い。

蜘蛛に自分を重ねて、蝶をあのこに見立てた。蝶を助けなかったのは、私以外蜘蛛の味方がいない気がして、…誰かに味方してほしくて。

薄暗い空に、星が輝きはじめる。こんな弱音吐いたりして、恥ずかしい。昔から私は、結局蓮に甘えてる気がする。

お互い何も喋らず、静まった空気が痛い。だんだんと不安になり、緩む涙腺をなんとかしめ、私はそっと彼を一瞥した。

「……………え？」

つい間抜けな声を漏らしてしまった私。何故なら、彼は声を抑えて震えながら笑っていたのだ。

「な、なんで笑ってるの…？」

彼の笑う理由が理解できず、嫌悪を表情に表す。蓮は口を手で抑えながら、だって、とか、ごめん、とか言って、くすくす笑う。私は余計に不機嫌になり、いつまでも笑いを無理にこらえている蓮の頭をはいた。

「いてっ！」

「あんたが悪い」

叩かれた頭をさすりながら、だけどやっぱりその顔には笑みが張り付いていて。私は訳が分からない、と蓮を睨んだ。

「ごめん、ごめん。いや、ヤキモチ焼くなんて可愛いと思ってさ」
「…ッ！子供扱いは」

私が言いかけたとき、急にぬくもりが私を覆った。
抱きしめられている

そう理解した途端、身体中に熱が集まった。心臓が音をたてて煩い。うまく呼吸できない。鼓動の速すぎで、死んでしまいそう。

「ちょっと、蓮…！」

「甘えていいよ。鈴華は確かに大人びてるけど、まだ小学生なんだから。我慢する必要なんてない、思いきり甘えて」

ひどく落ち着いた穏やかな声で蓮は言った。その言葉に、どうしようもないくらいこみあげてくる。

やだ、変な顔してるかも

見られたくなくて、私は彼の胸に顔をうずめた。より一層強くなる、私を抱きしめる力。彼のゆっくりとした心音が、とても心地好い。温かさにつつとりして、私は頬を何度も蓮の胸にすりつけた。

「私、あのこが生まれたら、優しくしてあげたいな」
「……うん」

厳しい自然界と違って、私達は人間だから。弱肉強食なんて言わないで。向けられる慈愛が自分にじゃなくても、それさえも受け入れるくらい大人になりたい。だけど私は心があるから、時々我儘許して。

彼にギュツと抱きつき、ゆっくり瞳を伏せた。

私が彼から離れたのは、もう月が昇っていた頃だった。薄暗い夜道を、二人並んで歩く。隣にいる蓮を、私は横目でチラチラ見た。

あ、目があった

ドキツとして、なにか言おうとしたら蓮が先に口を開いた。

「鈴華、おばさんのことだけど……」

私を気遣うように、遠慮がちに言う。私は彼が何を言おうとしてるのか分かった。

「大丈夫。お母さんが私のこと放ってるなんて、本気で思ってないよ。ただ……」

「寂しかった？」

「そ、そんなんじゃない！」

思考を読みとられて、私は思わず大きな声を出した。……やだ、恥ずかしい。

その会話を最後に、しばらくお互い黙りこむ。私は夜空に浮かぶ半月を見ながら、こんな時間まで外にいて心配かけたな、と思った。

「ねえ、蓮」

私の呼び掛けに、蓮は私を見ずに、ん？と返す。ドキドキする胸を落ち着かせて、私は決意してこう言った。

「男の子と女の子、どっちが生まれるか賭けない？それでもし私が

勝つたら、将来蓮の子供を私に生ませて？」

蓮は目をまるくして驚いたけど、直ぐに笑って

「そんな賭けしなくても、あと数年して鈴華がいい女になったら、
考えておくよ」

その笑顔が、やけに幼くみえて、少しだけ彼と近付けた気がした。

END

(後書き)

ジャンルは結構迷いました。前半は文学寄りだったので……だけど、恋愛要素のほうが多い気がしたので恋愛にしました。評価・感想・アドバイスお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4504b/>

生まれる命に祝福を

2010年10月11日03時24分発行